カペル橋

スイス・ルツェルン

スイス・1960年発行

スイス中央部の町、ルツェルンの中心部を流れるロイス川を斜めに横切って、中世由来の屋根付橋、カペル橋が架かっています。ロイス川は、ルツェルン湖とも呼ばれるフィーアヴァルトシュテッテ湖から流れ出る川で、ライン川の上流にもあたります。

カペル橋は、湖からの出口のそばの川幅が100mほどのところを浅い角度で渡り、かつ途中で折れ曲がっていますので橋長は200mを超えます。この橋は町を外敵から守る市壁の役割を持っていました。そのため外側つまり湖側の側壁が高く作られています。

初めて橋が架けられたのは1333年、旧市街と新市街を結ぶ通路として整備されたのは1365年のこととされています。内側の幅は３mほどで、３列の木杭で木桁を支え、両側に建てられた太い柱の上に三角屋根が載せられています。この形は14世紀から変わらず、木造の屋根付橋としてはヨーロッパでは最古のものとされてきました。

左岸（南側）のルツェルン劇場と右岸の聖ペテルス・カペル（礼拝堂）を結んでおり、橋名はこのカペルに由来します。この橋の天井の梁の上には三角形状の板絵が飾られています。多くは17世紀前半に描かれたもので、守護聖人の伝説や町や国の歴史などが画題になっていて、現在111枚を見ることができます。

カペル橋から400mほど下流に、同様の屋根付のシュプロイアー橋があります。架設は1408年とされています。構造はカペル橋とは違って、石造橋脚が木造のアーチやトラスの主構造を支えています。

左岸近く、カペル橋に接するように「水の塔」と呼ばれる塔があり、橋とともに町のシンボルになっています。とんがり屋根を持った八角形の石塔で、高さは34.5mあります。造られたのは橋より少し前で、元々は侵入者に対する見張り塔でした。

カペル橋は1993年８月に橋下に係留されていたボートの失火によって類焼、大半が焼け落ちてしまいました。ルツェルン市は早速再建に取り組み、翌年の４月には完成しました。軒下の板絵も復元され、観光スポットとしての賑わいを取り戻しています。

Ikiwaner　Kapellbrücke, Lucerne　https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Luzern_Kapellbruecke.jpg